

勿凝学問 233

世襲制限に対するポピュリズム批判のピント外れ

2009年5月22日

慶應義塾大学 商学部

教授 権丈善一

今週は、水曜日に日医の医療政策会議で北海道大学の山口二郎先生の報告「政治再編の課題としての社会保障」を聞いた。山口先生も僕も、[医療政策会議](#)のメンバーであり、僕は昨年11月19日に「[小さすぎる政府の社会保障と政府の利用価値——マイクロ・マクロの視点から](#)」を報告している。今回は山口先生の順番だった。

その山口先生の報告の中で、「ポピュリズム」という言葉がなんだか出てきたので、その日の夜あたりから、人に会うとポピュリズムについて話をするようになっていた。

「ポピュリズム」というような言葉については、だいたい僕なりの定義があり——僕の頭の中にはいろんな言葉に対して僕なりの定義が載った辞書が、どうもある——そして今日の講義では、講義名は社会保障論なのに、いつの間にか話が脱線してしまい、そこで、僕なりのポピュリズムの定義を説明しはじめていた。

正しい政治行為とは、合理的に無知な投票者に正しいことを説得することによって権力の地位をねらうことであるにもかかわらず、ポピュリズムというのは、合理的に無知な投票者に正しいことを説得する努力を放棄して（あるいは無知や誤解の度合いを増幅させて）、無知なままの投票者に票田を求めて権力を追求する政治行為である。

まあ、僕の中では、この定義で認識して、ポピュリズムという言葉の意味がはじめて腑に落ちることになる——Wikipediaにある「ポピュリズム (Populism) は、政治学概念の1つであり、政治過程において有権者の政治的選好が直接的に反映されるべきだとする志向を指す。エリート主義(elitism)に対する対概念である」では、言わんとすることを分からないでもないが、まだまだ舌足らず。。。

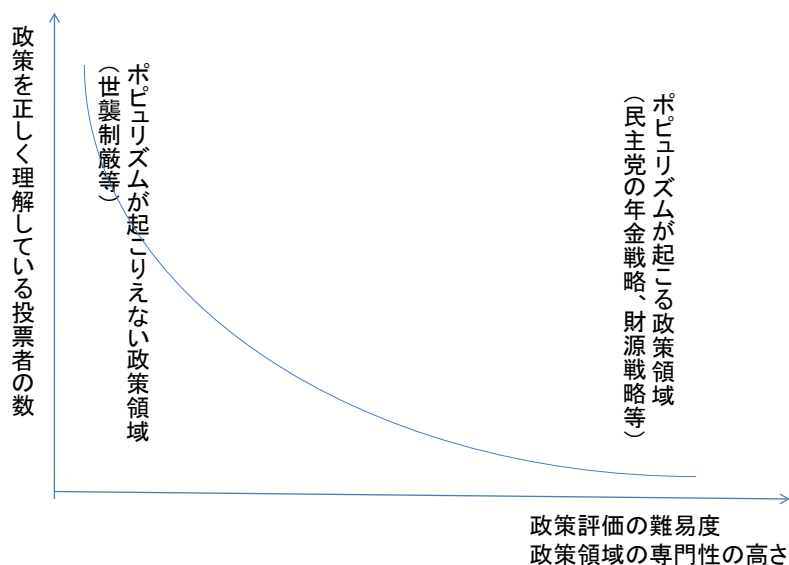
ところで、講義を終えて、ゼミの時間——学生がディベート「定年は延長すべきである」で遊んでいるときに、内職をするために開いていたパソコンにメールが届く。そこに次の文章を発見する。

昨日の[世襲議連](#)は大盛況でした。

一方で、もちろん出席していない議員らからは冷やかな意見もあって、「ポピュリズムだ」って声も根強いんですね。

なるほど。でもねえ、ポピュリズムという病理現象は、次の図の右側の領域で起こることであって、左側では起こらないんだよね。

ポピュリズムと政策評価の難易度



今日の授業でも話したことだけど、アウトカムの評価がエンドユーザーにとって難しく、需給者間の情報の非対称性が強い市場や政策領域では、供給者間の競争が激しくなると、言葉の正しき意味での消費者主権、投票者主権とはほど遠い、悪しき競争（エンドユーザーの無知につけ込んだいかさま商法・選挙戦略）が支配的になり、悪貨が良貨を駆逐するという弊害が目に見えてくるようになる。政治の場では、これがポピュリズムという病理現象として問題が顕在化してくることになる——わけだ。

だから、みかんやりんごのように、消費者にとって財の評価がさほど難しくない領域では、情報問題を原因とした市場の失敗が起こらないことと同じように、世襲制限のように、投票者にとって政策評価が難しくない領域では、ポピュリズムという政治の失敗は起こらない。

そういうこと。

したがって、世襲制限に対するポピュリズム批判は、ピントがずれているというか、バカげた話だ、ということになるわけです。

こういう話などを、社会保障論の講義の中でいつもやっているわけで、そうすると、先ほど、ゼミの掲示板に次の書き込みがあった。この書き込みが、この雑文でも書いてみようかと思わせたんだなあ。ありがとよ > <—

>適正な競争が行われるのであれば、利己的な行動は良い結果を生むこともある——経

済でも政治でも同じである（[勿凝学問 232](#) 頁）。

今年の「先生の「社会保障の授業」(w)では、政治と経済は、本質的には同じ論理に基づいて動いている、と感じられて、とても興味深いです。

予測の間違いに対するお詫び

わたくしは、昨年 12 月 23 日に書いた「[国民が喜ぶけど国民を不幸にしない方法としての「政治家の世襲禁止令」](#)」の中で、「この世襲禁止令は、小泉構造改革を継承する！と、今や「何いってんの？」と思われるようなことを相も変わらず言っている人たちが、なかなか出せない公約でもある」と書いていました。しかしこの予測は、みごとに外れました。

予測を間違えた理由は、政治家の得票率極大化行動に人情が介在する余地があると、まだまだ甘い考えをしていたことから生じたものだと思います。政治家たちの選挙当選への執念は、わたくしが想定していたよりも、強く厳しいものだったようです。

¹ 彼女は 4 年生で去年の講義にも出席している。去年の明日 5 月 23 日の講義では、5 月 19 日に公開となった社会保障国民会議の年金財政シミュレーションの説明をしている。ところが今年の今日 5 月 22 日の講義では、アローの不可能性定理と最適課税の考え方の話をし、来週は、アダム・スミスとリカードの違いを説明すると予告——本年度、未だに、社会保障の「社」の字も講義の中には出てこない。毎年同じ内容の講義をすることができる人が羨ましくもあり、こういう事情ゆえに、3 年生で履修した学生が、4 年生になっても出席する傾向があったりもするわけ。と言っても、社会保障国民会議が動いていた去年の講義が少し特殊で、普通は、僕の講義を受けた学生は、経済学の古典を手にするようになったりするような講義をしていたんだけどね。3 年前とか、社長（ゼミの中でのハンドルネーム）は、講義の冒頭に登場してきたスミスの『道徳感情論』を、4 月のはじめに一所懸命に読んでいた。社長にとっては、意味不明な本だったと思うけど・・・(´。`)ボソ...